

## 著者が語る

小林隆児著

『自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く』

— 関係発達精神病理学の提唱



ミネルヴァ書房

- A5判/292頁
- 2017年刊行
- 本体3500円

### ◎「関係をみる」ことは難しい

今から四年前に上梓した『関係』からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム（ミネルヴァ書房）は、一九九四年から一四年間続けた母子ユニットでの臨床研究の最初の成果ですが、そこで私は子どもの病態理解と治療を母子関係の相で考えてきました。その後、母子ユニットを離れて再び通常の臨床に戻ると、母子関係において立ち上がるころ（情動）の動きが、患者治療者関係においても同様に生起することを実感するようになりました。自分でもそれに驚かされるとともに「金の鉦脈を掘り当てた」手応えをも味わうことができました。

先の成因論としての書を皮切りに、生涯発達論（「甘えたくても甘えられない」）、治療論（「あまのじゃくと精神療法」）、発達障碍の精神療法（「まとも、本書は症状論（精神病理論）にあたります。乳幼児期に自閉症と診断される子どもの生涯発達過程で出現しうる多様な病態を、自験例を通して余すところなく描出しました。そこで明示したのは、発達障碍、神経症・心身症、行動障碍、精神病、人格障碍など、大半の精神病理の

成り立ちに乳幼児期早期の関係病理が深く関与していることでした。

以上五冊で私のライフワークは一応ケリがついたのですが、当初、自閉症臨床研究として始めたこの仕事も、振り返ると、心の病そのもの成り立ちと治療を解明しようとしてきたのだと気づかされます。

乳児期に母子間に生まれた根源的不安としての「甘え」のアンビヴァレンスは、子どもに強い不安と緊張をもたらすため、子どもはそれに対処すべく様々な反応を示します。それはこれまで精神医学で「症状」として捉えられてきたものです。そこでは症状が前景化し、アンビヴァレンスは背景化するため、臨床家は症状にとらわれやすのですが、本来の治療では、背景化したアンビヴァレンスを掘みとることが求められ、そのためには「関係をみる」ことが必須なのです。しかし、「関係をみる」ことは、「個をみる」ことを生業としてきた臨床家には非常に困難であることも確かです。なぜならそれは感じ取ることでしか掘めないからです。

そこで私は「関係をみる」ことと「個をみる」こととの相違を明確にしながら、「関係をみる」ことのできる臨床家を育てることをテーマに感性教育に取り組み始め、最近、その最初の成果を『臨床家の感性を磨く』（誠信書房）として上梓しました。まだまだ私の研究は続きそうです。



**小林 隆児**  
(こばやし りゅうじ)  
1949年生まれ。西南学院  
大学人間科学部教授。  
『臨床家の感性を磨く  
—関係をみる—』というこ  
と』（誠信書房）『あまの  
じゃくと精神療法—  
「甘え」理論と関係の病  
理』（弘文堂）。